

# 雨上がりの川

森沢 明夫 作

(167)

オカヤイツミ 画

## 第六章 それぞれのモノローグ(23)

### 【紫音の話】

「だって、仕方ないじゃない」

わたしは、ポロリとひとひらとをいぼした。

静かすぎる部屋のなか、その声はやけに大きく響いた。

チ、チ、チ、と時間を削り落としていく時計の音も聞こえる。削られた時間の滓は、雪のように一人の部屋に積み重なっていく。

ふと、やるべきことを思い出した。

わたしはテーブルの上に置いてあるスマートフォンを手にした。春香が自宅に着く前に、母親の杏子の携帯に電話をかけておかねばならないのだ。

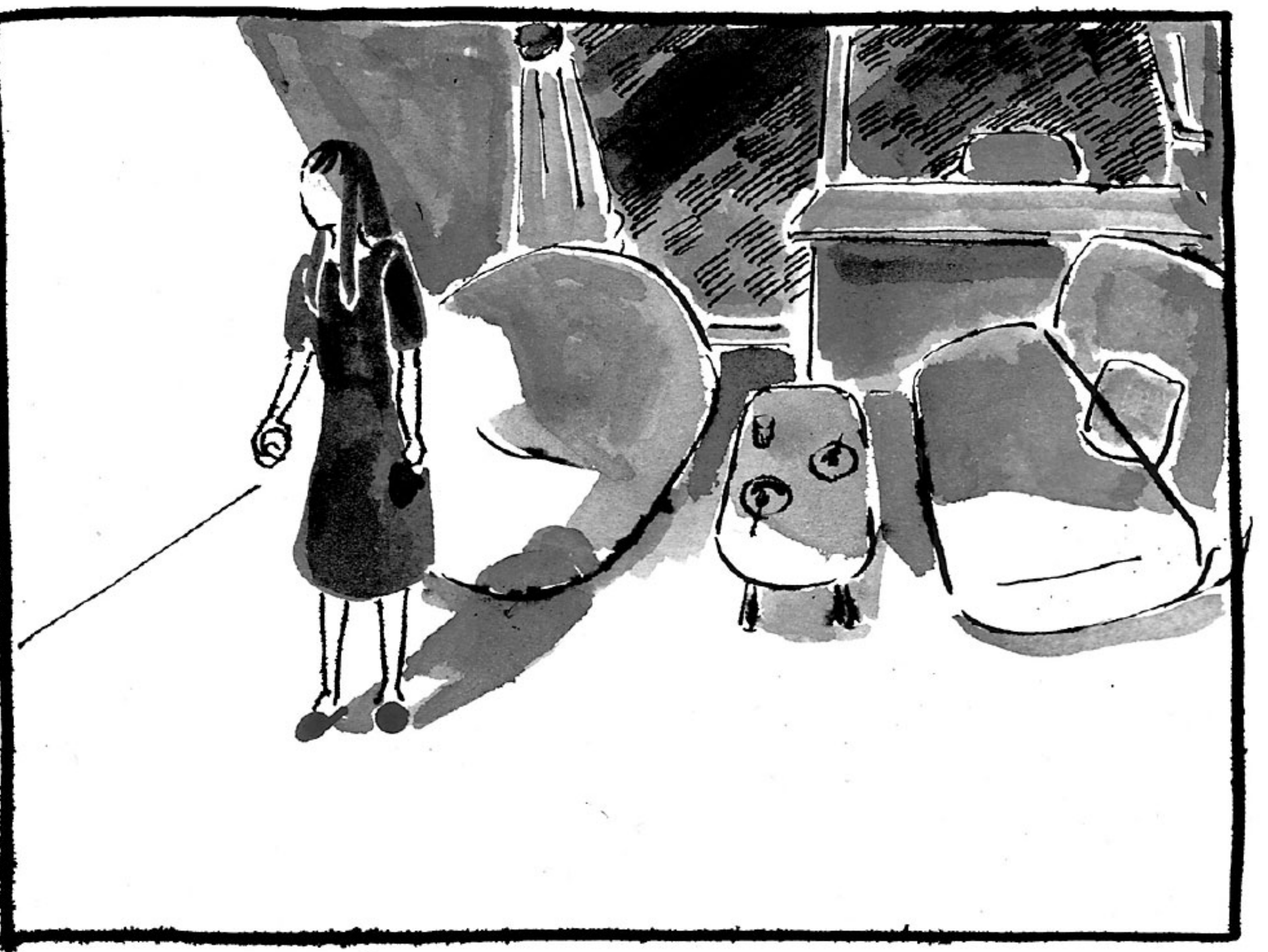
わたしに心酔している杏子は、三コールで出た。

「どうも、杏子さん、こんばんは」

わたしは万能の霊能者らしく、堂々とした声を作った。

「わあ、どうも、こんばんは。えっと、今日もなんだか、いろいろと——」

杏子は嬉しさが声に出ないよう、低く抑えているよう



だった。しかも、しゃべりながらどこかに移動しているような気配がある。きっと、編集者をやっているというご主人のいる部屋から離れて、一人になろうとしているのだろう。

端末の向こうで、カチャ、とドアが閉まる音がした。

すると、杏子の声がいつものトーンになった。

「あの、ありがとうございます。春香、どうでした?」

「とっても元気そうでしたよ。いまわっき、帰りましたんで」

「いつも、すみません」

「いいのよ、わたしも春香ちゃんのおしゃべりを楽しんでるんだから」

「なんか、紫音さんのところにお邪魔するようになってから、あの子、ますます元気になってきたみたいで」

「うふふ。それはよかった。あ、そうそう、今日ね、春

香ちゃんに霊能力の開花をせがまれたの。聞いてるでしょ?」

「ええ。紫音さんをお願いしてみるって、嬉しそうに言うてました」

「ならよかった。とりあえず開花させておいたから」

「わ……、すごい。あ、料金は、今度お会いしたときに

——「ああ、いいの、いいの。これはサービスだから」